今は絵画一筋で、制作に励む古川さん

術賞に輝く

受賞者のプロフィール

絵画 古川忠次さん

道東の自然に自己追求

誠実な画業、個展の成果実る

五十五年釧新郷土芸術賞の受賞者が決まった。一人は北方性の探究に、厳しく自己と闘いながらキャンバスに向かい続ける古川忠次さん、一人は郷土に根ざした作曲活動に、あるいは

昭和六年、青森県深浦町岩坂で生まれた。家業は農家で、八人きょうだいの一番上。絵を描くのが〝三度の飯より好き〟で、両親の「絵描きで貧之するな」との忠告も聞かず、二十歳の時日展評議員の奈良岡正夫氏の教えを乞うため実家を飛び出した。二年間は内弟子として修業したが、その後は北海道に渡って左官、ペンキ屋、漁業とさまざまな職業に携わりながらも夜は眠い目をこすりながら絵筆を握ることを忘れなかった。

しかし、本当に芸術を追求するならば〝二足のワラジははけない〟と十年前、仕事をやめ絵画一筋の人生を送り始めた。「働けばお金はあるが暇がない、仕事をやめれば時間はあるがお金はない。どうせ苦しむのなら本当に自分の好きな道を進もう。それが素直な生き方と思った」―と古川さん。それからというものは、寝ても覚めてもキャンバスの絵が頭から離れず、芸術への模索の日々は続く。

古川さんの絵にかける情熱は、相当なもの。「ボクは暗い色調の風景画が多いが、その風景のカゲに表れるのは自分の生い立ちであり、故郷だ。売れる絵を描くのは画家ではなく商人であり、ボクは広大で変化の激しい道東の自然美を徹底的に掘り下げていきたい」と言う。そんなひたむきな努力が実って、古川さんの絵は造形展で佳作賞、日展入選（いずれも四十八年）昭和会展招待出品（五十年）現代洋画家新人選抜展新人賞受賞（五十一年）と数々の賞に輝いている。

「ボクはこれまで女房に苦労をかけながら絵を描いてきたが、三十年かかってようやく光がかすかに見えかけた段階。自分の好きなことをやって、表彰されると責任という〝オモリ〟が肩にのしかかったような感じ。今後は恥をかかないような仕事をしなければだめと思うから…」と話す口調は、謙虚さそのもの。四十九歳。釧路市白樺台二の二。

ケストラ編成の曲「ラプソディー